

浮舟

與江元久作

細川弘源寺作とも

前

ワキ 旅僧

シテ 里女

後

シテ 浮舟の君

地は 山城

季は 冬

ワキ詞

「是は諸国一見の僧にて候。我此程は初瀬に候ひしが。是より都に上らばやと思ひ候。

道行

「初瀬山。夕越え暮れし宿もはや。く。檜原のよそに三輪の山。しるしの杉も立ち別れ。嵐と共に檜の葉の。暫し休らふ程もなく。狛の渡りや足早み。宇治の里にも着きにけり。く。

詞

「急ぎ候ふ程に。是は早宇治の里に着きて候。暫く休らひ名所をも詠めばやと思ひ候。

シテ一声

「柴積船の寄る波も。なほたづきなき憂き身かな。憂きは心の科ぞとて。たが世をかこつ方もなし。

サシ

「住みはてぬ住家は宇治の橋柱。立居苦しき思ひ草。葉末の露を憂き身にて。老い行く末も白真弓。もとの心を歎くなり。

下歌

「とにかくに。定めなき世の影頼む。

上歌

「月日も受けよ行末の。く。神に祈りの叶ひなば。頼みをかけて御注連縄。長くや世をも祈らまし。

く。

ワキ詞 「いかに是なる女性に尋ね申すべき事の候。

シテ詞 「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ 「此宇治の里に於て。古へ如何なる人の住み給ひて候ふぞ委しく御物語り候へ。

シテ 「所には住み候へども。賤しき身にて候へば。委しき事をも知らず候ふさりながら。古へ此所には。浮舟とやらんの住み給ひしとなり。同じ女の身な

れども。数にもあらぬ憂き身なれば。いかでかさまでは知りさぶらふべき。

ワキ 「実にく光る源氏の物語。猶世に絶えぬ言の葉の。それさへ添へて聞かまほしきに。心に残し給ふなよ。

シテ 「むつかしの事を問ひ給ふや。里の名を聞かじといひし人もこそあれ。さのみは何を問ひ給ふぞ。

地 「さなきだに古の。く。恋しかるべき橘の。小島

が崎を見渡せば。河より遠の夕煙。立つ河風に行
く雲の。跡より雪の色添へて。山は鏡をかけまく
も。賢き世々に有りながら。猶身を宇治と思はめ
や。く。

ワキ詞

「猶々浮舟の御事委しく御物語り候へ。」

地クリ

「そもく此物語と申すに。其品々も妙にして。事
のころ広ければ。ひろひて云はん言の葉の。」

シテサシ

「玉の数にもあらぬ身の。そむきし世をや頭はすべ

き。

地

「まづ此里にいにしへは。人々あまた住み給ひける類
ひながら。取り分き此浮舟は。薫中将のかりそめ
に。すゑ給ひしなり。」

クセ

「人がらもなつかしく。心ざまよし有りて。おほと
かに過し給ひしを。物いひさがなき世の人の。ほ
のめかし聞えしを。色深き心にて。兵部卿の宮な
ん。忍びて尋ねおはせしに。織り縫ふ業のいとま

なき。宵の人目も悲しくて。垣間見しつゝおはせしも。いと不便なりし業なれや。其夜にさても山住の。めづらかなりし有様の。心にしみて有明の。月澄み昇る程なるに。

シテ「水の面も曇りなく。

地「船さしとめし行方とて。汀の氷踏み分けて。道は迷はずと有りしも。浅からぬ御契りなり。一方は長閑にて。訪はぬ程経る思ひさへ。晴れぬ詠めと

有りしにも。涙の雨や増さりけん。とにかくに思ひわび。此世になくもならばやと。歎きし末は、
かなくて。終に跡無くなりけり。く。

ワキ詞「浮舟の御事は委しく承りぬ。さてく御身は何処に住む人ぞ。

シテ詞「是は此所にかりに通ひものするなり。妾が住家は小野の者。都のつてに訪ひ給へ。

ワキ「あら不思議や。何とやらん事たがひたるやうに候。

さて小野にては誰とか尋ね申すべき。

シテ

「隠れはあらど大比叡の。杉のしるしはなけれども。

横川の水の住む方を。比叡坂と尋ね給ふべし。

地

「猶物の気の身に添ひて。悩む事なんある身なり。

法力を頼み給ひつゝ。あれにて待ち申さんと。浮

き立つ雲の跡もなく。行く方知らずなりにけり。

く。

(中入)

ワキ詞

「かくて小野には来たれども。何処を宿と定むべき。

歌

「所の名さへ小野なれば。く。草の枕は理や。今

宵はこゝに経を読み。彼御跡を弔ふとかや。く。

後ジテ

「亡き影の絶えぬも同じ涙川。よるべ定めぬ浮舟の。

法の力を頼むなり。あさましや本より我は浮舟の。

よる方わかでただよふ世に。憂き名洩れんと思ひ

わび。此世になくもならばやと。明暮思ひ煩ひて。

人皆寐たりしに。妻戸を放ち出でたれば。風烈し

う川波荒う聞えしに。知らぬ男の寄り来つゝ。誘

ひ行くと思ひしより。心も空になりはてゝ。あふ
さきるさの事もなく。

地 「我かの気色もあさましや。

シテ 「あさましやあさましやな橘の。

地 「小島の色は変らじを。

シテ 「此浮舟ぞよるべ知られぬ。

地 「大慈大悲の理は。く。世に広けれど殊に我。心
一つに怠らず。明けては出づる日の影を。絶えぬ

光りと仰ぎつゝ。暮れては闇に迷ふべき。後の世
かけて頼みしに。

シテ 「頼みしまゝの観音の慈悲。

地 「頼みしまゝの観音の慈悲。初瀬の便に横川の僧都
に。見付けられつゝ小野に伴なひ。祈り加持して
物の気のけしも。夢の世に猶。苦しみは大比叡や。
横川の杉の古き事ども。夢に顕はれ見え給ひ。今
此聖も同じ便に。弔ひ受けんと思ひしに。思ひの

まゝに執心晴れて。都卒に生まるゝうれしきと。
いふかと思へば明け立つ横川。いふかと思へば明
け立つ横川の。杉の嵐や残るらん。杉の嵐もや残
るらん。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第四輯』大和田建樹 著